
グリード

ドリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリード

【Nコード】

N94590

【作者名】

ドリル

【あらすじ】

ある願いを叶える為に普通の高校生タケルは悪魔の誘いによって悪魔の待つ世界に向かってしまう。タケルを待つのはいったい何か？、願いか、それとも……

悪魔との契約（１）（前書き）

初めて書いたので暖かい目で読んでくれると嬉しいです。

とりあえずある程度は書きますが、皆さんの感想で続きを書こうか考えていますので、読んだら感想をお願い致します。

悪魔との契約（1）

あの日、俺の一つの強い願いが、強い欲が、あんなことに繋がるとは思いもしなかったんだ

12月22日

冬の風は痛いほど冷えていて、屋上で時間を潰してる十六歳の僕には、まさに極寒としか感じなかった。

「うう、さむうい、そろそろかな」

僕が何故こんな寒空で待つてるかというと、それは……

「ごめんなさい、お待たせしました。タケル」

屋上のドアを勢いよく開けて、眩しいくらいの笑顔を向けながら一人の女の子がこっちに走りよってきている。後ろ髪のポニーテールが綺麗にしなる。彼女は幼なじみの神坂空^{（こうさか そら）}。僕が今まさに待っていた相手だ。実は物凄いい嬢様で、その上僕なんかには高嶺^{（たかね）}の花と言っても過言じゃないくらいのお色兼備で性格はかなりのお人好し。でも少し天然なのがたまにキズ

「大丈夫、そんなに待ってないよ……って、ちよつと空?！」

立ち上がって汚れを払おうとした僕の両頬を空の両手が包む。両手から温かい感触が伝わってくる。その上顔が凄く接近している思わずドキッとしてしまう。

「こんなに冷たくなるまで待たせてしまつてすみません」

そんな僕的心情を知つてか知らずか、空はその距離のまま微笑みを向けてくる。

「い、いやつ、別につそんな、空が気にすることないよ」
顔が赤くなるのを誤魔化す為につい顔を背けてしまう

「…はい、それじゃあ帰りましょう」

そんな僕の行動を気にする様子もなく空は優しい微笑みをしたまま僕を帰りに誘ってくれる。僕はいつしかその微笑みを向けてくれる空に惹かれてしまっていた。

二人で校門まで来たところで遠くから人影がゆっくり近づいてくるのがわかった。

「よおお二人さん、今日もお熱いねえ」

短めの髪をツンツンに立てて、グ○ンラ○ンで出てくるようなサングラスをかけた長身の男が僕らに声をかけてきた。

「別に…そんなんじゃないよ、^{カミヤ}上矢」

彼はカミヤ、空と同じ僕の幼なじみだ、あまり成績はよくなくて一年留年してる高校三年生。あ、言い忘れてたけど空は僕と同じ高校一年生だよ。

「年上を呼び捨てかあ？、どうせなら兄貴って呼べ！」

上矢はサングラスを人差し指でクイツとあげて男らしい笑みを僕に

向けてくる。

「カミヤさん、暑いんですか？、今日の気温は七度ですが、とても暑がりなんですね」

空には文字通りの意味にしか聞こえなかったようだ。伊達に皆から天然と言われているだけあるなとついつい呆れてしまう

「いや、そういう意味じゃなくてだな空…、ええっと」

流石のカミヤも空の天然には適わないみたいだ。昔からこうなったから大抵カミヤが途中で諦めてる。

「まあいい、おいタケル！、これからちよいと顔貸せ」そう言つと同時に僕の肩に腕をまわして強引に連れていこうとする。

「えっ?!、やつ、でも……」

僕は慌てて空の方に視線をやった。

(僕は空と帰りたいんだけどなあ)

空はそんな僕達を見てただ優しく微笑んでいる。

「いいですよ、私に気にせず行ってきたください、たまにはカミヤさんもタケルと遊びたいんですよ」

空はいつもの様に僕らを気遣っているような言葉を掛けてくれた。

「流石は空嬢！、話が分かるじゃねえか。じゃあちよいとタケルを借りてくぜい」

「はい、いつてらっしゃい」

そう言いながら空が手を降っていたので僕も手を振り返した。
そのままカミヤについていこうとしたとき

「あつ、待ってタケル」

急に呼び止められて振り返ると、空の顔が間近に迫っていた。そして彼女の唇が僕の耳元にきたとき

「明後日の24日、ここに午前10時に来てくださいね。私、貴方と行きたいところがあるの」

そう呟くと、すぐに顔を遠ざけて、僕が好きなあの優しい笑顔をしていた。寒さのせいか、夕日のせいなのか、彼女の頬が赤く染まっているように見えた。

彼女はそのままUターンして走り去ってしまった。僕はただその場に立ち尽くしてしまっていて、カミヤも驚いた様子だった。もし今の僕が鏡を見たら、この真っ赤になっているであろう顔を、すぐに隠そうとしたかもしれない。

悪魔との契約（１）（後書き）

どうでしたか？、まだ最初の部分だけでなんとも言えないかもしれませんが、できれば感想お願い致しますm（| |）m

悪魔との契約（2）（前書き）

一話を投稿した翌日に体調を崩してしまい、予定より更新が遅れて
しまいすいませんでしたm（――）m

悪魔との契約（2）

歩くこと十五分、普段の帰り道とは違う道を男二人で歩いていく。

「ねえ、カミヤ、僕達どこに向かってるの？」

僕は何も聞いてないからカミヤに問いかけた。

「……」

でもカミヤは黙ったままで何も答えてくれない、何か重大な事なのかと思い、

「ねえカミヤ、一体これから」

何をしに行くの？、と問いかけようとしたらカミヤがいきなり口を開いた

「兄貴って呼べ」

「……………へっ？」

あまりに予想外だったので思わず聞き返してしまった。

「ねえ、カミ……」

「兄貴って呼べ！」

「いや、だからカミ……」

「あううにいきいつて呼べー!!」……どうしてもそこは譲りたくないらしい、確かに昔なら「カミ兄ちゃん」って読んでたけどカミヤが中学の時に「兄ちゃんじゃ男らしくねえ」とか言って禁止されてしまったからカミヤって呼んでたのに、なんでまた急に言い出すんだろぅ?。とにかく言わないと話が進まなそうだ。

「わ、分かったよカミ……あ、あに、き」

思わずまたいつも通りに呼んじやうところだった。

「おう、なんだ?、タケル」

さっきまでのやり取りがなかったかのような爽やか?な顔で聞いてきた。

「やつ、だからどこに何をしにいくの?って聞いたんだけど」

するとカミヤはにいつと悪役みたいな笑みを浮かべた。

「ちょっと向こうにある廃屋だ。何かあるかは着いてからの楽しみってやつだ」

こんなこと言うけどカミヤが楽しみにしてると言った場合は大抵無茶苦茶なことだ。このまえなんか逃げ出した近所の猫を捕まえる為に、屋根から屋根へ飛び移らされたし、さらにその前はツチノコを捕まえると山に行ってクマに襲われると、どれも寿命が縮むような事ばかり。次はどんな目にあうことやら。そんなこんなと先に後悔しとこうとしてた間に着いてしまったようだ。

「ここだ、どうだ?、廃屋にしては立派だろぅ?」

確かに目立った汚れも見当たらず、雑草も少ない。

「最近廃屋になったの？」

不思議に思っ僕はカミヤに聞いてみた。

「さあな、近所のおばちゃん達の噂によると住んでる人は見たことないらしい。」

「…そつか」

不思議な感じがした。誰にも使われてないはずなのに、誰かが此処を必要としているような気がして。

「まあ、そんなことより中に入ってみるよ、お楽しみが待ってるぜ」

カミヤが戸口で急かすので僕は小走りでそこに向かった。

中はファミレス等と同じくらい広いが、埃っぽかった。屋内の中心にはビニールシートに何かが覆われていた。

「さて、それじゃあ待ちわびたお楽しみを見せてやるぜ」

カミヤが勢いよくビニールシートを引っ張り、バサアッと豪快な音をたてて空中を舞った。そして、そこにあったのは

「これが…お楽しみ？」

木刀に赤いマント、そして狼の横顔のような絵をかたどった150cmくらいの旗だった。

「おうよ、どうだこの旗、かつちよいいだろ?」

カミヤはまるで子どものようにはしゃぎながら旗を掲げた。

「でも、これで一体何をするの?」

僕は暴走族にもなるんじゃないかと内心ヒヤヒヤしてたけど、カミヤからは予想外の答えが返ってきた。

「何をつて、決まってるだろ、自警団だ」

なんだ自警団かあ、暴走族じゃなくてよかった。

「そつかあ、自警団かあ、それはよかつ…って自警団?!、なんで?!」

今納得しかけちゃったけど、よく考えると、とんでもないこと言ってるよ。僕が理由を聞くとカミヤは急に真面目な顔になった。

「何でって……最近、この町に他所から不良のグループがたくさんやって来てるの知ってるか?」

確かにここ最近、他校の不良らしき格好をした学生を頻繁に見かけていたから知ってはいた。

「知ってるけど、それがどうかしたの?」

何かカミヤのかんにさわるようなことでもしたんだろうか。

「あいつらが公園やコンビニにたむろってるせいで、年寄りやガキ

共はビビって気軽に入ることもできねえ、それにあいつら、ガキ共や年寄りを突き飛ばしたりすることもあつたみたいだからな。」

カミヤは話してる時、凄く不機嫌な顔をしてた。しまいには近くのゴミ箱を蹴飛ばしてしまった。

「だから、この高坂町の平和を守る為に！、俺達で自警団を結成して、奴らを追い出そうってわけだ！」

驚いた。カミヤがそんなことを考えていたなんて、いつも楽しむ事ばかり考えてるものだと思ってた。けど…

「でも、僕達がやなくても、警察とかに頼んでみれば」

そう、このご時世、警察という国家権力があるのだから、自警団なんて意味ないんじゃない、しかしカミヤは僕のそんな考えをすぐに否定した。

「突き飛ばされたとかそんな小さな事ばかりじゃサツは動かねえよ、それに俺は町の奴らがビクビクしてんのを黙って見てらんねえ。それに俺は他人任せなんざごめんだ」

……、僕は今のカミヤ、いや、兄貴の言葉に心をうたれて、警察に任せようなんて言っただのが馬鹿馬鹿しく思えた。

「ごめん、兄貴、俺が間違ってたよ。やろう、俺達でこの町の平和を守ろう！」

すると兄貴はまるで僕がそう言うのを分かっていたかのような笑みを浮かべた。

「その言葉を待ってたぜ！、兄弟！！、よし！、ここに俺達の、この町の自警団、牙連団の結成だ！！！」

兄貴は人差し指を天に突く勢いで高々とあげて、ここに自警団、いや、牙連団の結成を宣言した。

悪魔との契約（3）（前書き）

いつも短いのに、更新遅くてすみません。できるだけ早くしているつもりなのですが、なにぶん素人なもので

悪魔との契約(3)

「それで、これからどうするの？ アニキ」

いくら自警団を作るといつてもたった二人じゃ名前負けしてしまう。

「なあゝに、んなもん、やってればそのうち増えるだろゝよ」

……よくよく考えたら、アニキに計画性なんてないことは、昔からわかってたことだ。アニキはあんなこと言っただけ、正直僕はケン力なんて強くないから、不良達からみんなを守るかどうか、むしろ守られてしまうかもしれない、……それだけは避けたい、絶対に「何さつきから一人でぶつぶつ言ってるんだ？」

あ、なんか声に出てたみたいだ。

「あつ、いや、何でもないよ、アニキ」

アニキはちよつと不思議そうな顔をしてたけど、すぐにどうでもよくなったみたいで、別の話をしだした。

「そうそう、すっかり忘れてたが、もう一つ大事なことがあるんだ」
そういうや否や、アニキは奥へと歩いていってしまった。慌てて追いかけてみると、日光が当たらない場所のせいか、さっきの場所からは暗くてわからなかったが、何かに黒いビニールシートがしかれていた。

「これは？」

僕には何かわからず、アニキに聞いてみたが、アニキは何も言わず、ただいつもの得意顔でビニールシートを引っ張った。そこにあったのは一つの黒いバイクだった。ハンドルの外側には、牙連団のマークが彫ってあった。

「この前道端で捨てられてるの見つけてな、洗って使おうとしたのはいいんだが、何故か動かねえんだ。タケル、お前の腕でなんとかできねえか？」

確かにうちは昔は工具屋だったから、バイクは見たことぐらいならあるけど、直したことはない。

「よくわからないけど、とりあえずやってみるよ」

とりあえずまず動かない原因を探さなきゃ。

「流石タケル！、工具を使わせたら、お前の右に出るやつはいねえもんな、中でもお前のお気に入り……」

アニキがいつもの語りをしてるのを聞き流しながらも、僕は早急に動かない原因を発見できた。

「アニキ、分かったよ、原因が」

すると、アニキは喋るのを止めて、驚いた顔をしていた。

「本当か？！、早いな、で、何だったんだ？」

「……燃料切れだよ」

「……………」

一時間後

「よーし、これから牙連団の活動を始めろ！」

その後、近くのガソリンスタンドで燃料を入れる羽目になった。まさか、アニキが百円しか持ってないとは思ってなくて焦ったけど、アニキの全財産の少なさに同情した、ガソリンスタンドのおじさんがまけてくれた。ありがとう、名もなきおじさん。

「活動って、何するの？」

疑問をぶつける僕に、アニキははんば呆れている顔をしていた。

「忘れたのか？、俺達牙連団は自警団だぞ、ならやることは一つだ」別に忘れてたわけじゃなかったけど、まさかまだ二人しかいないのにも関わらず、実行に移すとは思ってなかった。

「でもさすがに、二人だけじゃ……」実際、僕は戦力になりそうにないから、アニキ一人とあまり変わらない。

「大丈夫！、俺とお前なら、どんな奴らだつて楽勝だ」

どこからそんな自信がわいてくるのか、僕には分からなかった。

「この近くの公園に、よくたむろっている奴らがいるらしい。そいつらとつちめに行くぞ」

そう言つてアニキは、バイクに乗ってヘルメットを被る。

「ほらよ、さつさと乗れ」

アニキが投げた、もうひとつのヘルメットを、間一髪でキャッチする。それを被ろうとしたとき、僕の脳裏に、ひとつの疑問が浮かんだ。

「アニキ、免許持ってたの？」アニキの体が僅かだけど、ビクッと動いた。

「……………」

「……………」

一時の静寂が場を包んだ。

「あゝ、まああれだ。細かいことは気にすんな。それよりさつと行くぞ」

僕はその日、初めての走馬灯を体験した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9459o/>

グリード

2011年10月8日06時45分発行